

2021年度第34回日本リスク学会年次大会 @オンライン (Zoom)

企画セッションB4 : 「食品中の杞憂のリスクを議論する」

2021年11月21日 (日) 10:50~12:20

残留農薬のスマート・リスクコミュニケーション

The Smart Risk Communication Concerning Residual Pesticides

○**大瀧直子***, **山口治子****, **山崎毅***

Naoko OHTAKI-SHIMAUCHI, Haruko YAMAGUCHI

and Takeshi YAMASAKI

***特定非営利活動法人食の安全と安心を科学する会, **愛知大学**

緒言

- 残留農薬は主要な食品由来のハザードであるが、リスクアナリシスの枠組みの下、食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省、環境省が連携して厳格なリスク評価、リスク管理がなされている。残留農薬のリスクは非常に小さいにも関わらず、いまだに消費者は残留農薬を不安に感じ、リスク認知バイアスが生じていると考えられる。
- 食品のリスクについて、消費者の不安に寄り添った丁寧な説明を行うことで、確証バイアスの低減、およびリスク認知バイアスの改善を促す試みを実施してきた。消費者の不安に共感する設問をベースとしたスマート・リスクコミュニケーション（SRC）手法を残留農薬についても応用できないか、検討を行った。
- 食品添加物やゲノム編集食品に対するリスク認知バイアスの補正について本学会にて報告（添加物：79人／100人、ゲノム編集食品：66人／100人）。
(2018, 2020)

方法

- 残留農薬に関してSRC手法の効果を検証するため、インターネット調査研究を行った。
- 具体的には、**消費者が残留農薬を不安に思うと考えられる理由**を提示し、それに対する専門家の知見をわかりやすい文章で説明した。
- 次に、**説明文を読み、説明文の内容が理解できたか、不安に感じていたことがどのように変化したか**を解析した。
- カイ二乗検定/フィッシャー正確確率検定/クレメールの連関係数により設問間の相関の有無を解析した。
- 不安要因について主成分分析を実施し、不安の要素について考察を加えました。

インターネット調査は「楽天インサイト株式会社」の登録モニター（30～49歳の女性）を利用して実施した「料理を週1回以上する、買い物の際に食品表示をチェックする」モニターのうち、「農薬を使用して栽培された野菜や果物はできれば食べたくない」と回答した100人を抽出



アンケート

Q1 「農薬を使用して栽培された野菜や果物はできれば食べたくない」と考える理由
(複数回答可)

理由

- A1-1. 将来想定外の毒性が現れる不安
- A1-2. 無農薬が安全
- A1-3. 農薬の発がん性への懸念
- A1-4. 環境や持続可能性への影響
- A1-5. 農家に対する監視の不備
- A1-6. 農家自家用品の農薬不使用への誤解
- A1-7. 輸入品の全検査不徹底
- A1-8. オーガニック志向
- A1-9. 食品の裏情報に関する書籍、記事
- A1-10. その他



Q2 「農薬」の安全性について、食のリスクに詳しい専門家の説明を理解できたか（複数回答可）

説明

- A2-1. 安全性評価試験、無毒性量
- A2-2. 無農薬の危険性、カビ、細菌
- A2-3. 発がん性試験
- A2-4. 環境への影響評価試験
- A2-5. 農薬取締法、モニタリング検査
- A2-6. 農薬使用の手間とコスト削減が理由
- A2-7. ブラックリストへの集中検査
- A2-8. 堆肥使用や自然栽培のリスク
- A2-9. 誤情報への警鐘
- A2-10. 理解できない



Q3 専門家の説明文を読んでQ1の不安が解消したか
(複数回答可)

Q1 「農薬を使用して栽培された野菜や果物はできれば食べたくない」と考える理由

A1-1	農薬が残留した野菜や果物を毎日食べていると、将来何が起こるかわからない。想定外の毒性があらわれる可能性を否定できないから。	59%
A1-2	農薬を使用した野菜と無農薬の野菜を比較すると、無農薬（後者）の方が安全と思うから	64%
A1-3	一部の農薬で発がん性が報告されたと聞いたことがある。発がんリスクがあるなら、残留農薬はゼロでない心配だから。	32%
A1-4	農薬を使用した栽培は環境や持続可能性への影響が心配されているから。	16%
A1-5	農薬は国が安全性試験により使用量を決めたと聞いたが、農家が多めに使用しても監視ができていのかどうか疑問だから。	25%
A1-6	農家の方々が、自分たちが食べる野菜には農薬を使わないと言っていたと聞いたことがあるから。	18%
A1-7	輸入した野菜や果物の残留農薬はすべてを検査するわけではないと聞いたので、安全とは限らないと思うから。	23%
A1-8	野菜はオーガニックがよいと信頼できる人（家族・友人・知り合いなど）から教わったから	4%
A1-9	「食べてはいけない・・・」など食品の裏事情に関する書籍や記事（週刊誌・TV番組・ネット情報等）を読んで、農薬を使った野菜や果物は危険と感じたから。	9%
A1-10	上記以外のその他の理由	3%

Q2 農薬の安全性に関する専門家の説明について理解できたと回答した人の割合

A2-1	将来、想定外の毒性が発現するのではとのご心配があるとのこと、お気持ちは理解できます。ただ、国の独立したリスク評価機関である内閣府食品安全委員会の専門家が将来の毒性発現の可能性についてどう評価しているかご存知でしょうか。様々な動物試験により毒性が出ない摂取量（無毒性量）を求め、それに安全係数（通常は100分の1）を乗じて、ヒトが一生涯食べ続けても健康に悪影響が出ない量（許容一日摂取量：ADI）を求めたうえで、さらに十分低いレベルに農薬の残留基準値が設定されています。残留基準値から、農薬の使用量、使用回数、使用方法が決められ、生産者はそれを遵守していますので、想定外の毒性が現れることはない、と専門家は評価しているのです。	62%
A2-2	無農薬栽培が必ずしも安全であるとは言えません。例えば、農薬を使用しないことで、作物が害虫に食われ、食われた部分にカビが生え、人体に有害なカビ毒が産生されることもあります。また、農薬を使用しないために、環境中の細菌やウイルスにより作物が病気になり、作物そのものが人体に有害な物質を産生する場合もあり、農薬を使わないことによる健康リスクを考える必要があります。	70%
A2-3	発がんリスクとは「グリホサート」などの情報をみられたのでしょうか。一部の農薬について発がん性が疑われるとのことですが、国が承認した農薬は登録の際、安全性試験として、様々な種類の遺伝毒性試験（遺伝子に影響して突然変異を引き起こす性質を調べる試験）や発がん性試験（マウス、ラットのほぼ一生、約2年にわたってできるだけ多量に摂取させて、ガンができるかどうかを調べる試験）が行われ、発がん性のリスクがくわしく評価されています。その結果、変異原性（遺伝毒性）と発がん性がともに認められた場合は閾値が設定できないと判定され、そのような農薬については1日許容摂取量が設定できないと判断されて、使用が認められません。試験をパスしたものだけが農薬として登録され、散布方法が厳格に定められていますので、食卓に上る時点において残留農薬が問題になることはありません。	48%
A2-4	おっしゃるとおり農薬の使用による環境への影響は十分配慮が必要です。実際、農薬は登録の際、環境中での挙動、影響評価試験を行います。土壌中での挙動、土壌残留性、水中での挙動、水質汚濁性、有用生物への影響、水中生物への影響等が調べられています。環境への負荷をできるだけ低減するため、環境中に残留しないよう、最近では分解性の高い農薬が使用されるようになってきました。	52%
A2-5	農薬は農薬取締法により、使用可能対象作物、使用回数、使用量、使用時期等使用方法が細かく定められており、生産者はこれを遵守しないと法律違反となります。また、正しい使用方法が守られていることを確認する目的で、収穫された農産物の定期的なモニタリング検査が各地方自治体で行われています。このことにより、農薬の残留量が基準値を超えることがないよう監視されているわけです。	49%

Q2 農薬の安全性に関する専門家の説明について理解できたと回答した人の割合

A2-6	<p>農家にとって農薬散布は、手間とコストがかかります。また、現在使用が許可されている分解性の高い安全な農薬は、非常に高価であるため、使用量を下げたいのですが、害虫にやられた農産物は、収穫後の痛みが速く、市場に流通させることはできません。何より、虫が入っていたり、虫に食われた穴だらけの農産物を消費者は歓迎しないでしょう。ですので、出荷する農産物は、病害虫の被害による減収、減益を防ぐため、農薬を使用せざるを得ないのが現状です。一方で、自家で消費する農産物であれば農薬を使用しないことで生じるデメリット、すなわち、害虫による食害で外見の悪化、商品としての劣化があったとしても、問題はありません。だからといって農家の方々が、出荷用に農薬を使用して栽培した野菜を食べないわけではなく、売れ残った野菜も普通に食べられています。</p>	53%
A2-7	<p>輸入食品は海外での農薬の使用状況が見えにくいためご心配なのはうなずけます。残留農薬を検査するためには、野菜や果物を細かく粉砕して、農薬成分を取り出す（＝抽出する）必要があります。このため、すべての農産物を検査するということではできません。ですから、国（検疫所）で必要と考えられるものについて必要な頻度で検査が行われ、もし仮に違反が疑われるようなものがあれば、検査が強化されます（違反を繰り返す輸入国や輸出入業者はブラックリストがある）。また、農薬監視のポイントは検疫だけでなく、たとえば中国からの輸入野菜では輸出の時点で相当厳しい農薬検査が実施されておりますので、消費者の安全を守るために安全な農産物が流通する仕組みがしっかりと構築されているのです。</p>	52%
A2-8	<p>自然食品志向でオーガニックが好きな方々は国際的にも多くなってきましたね。ただ、オーガニックが安全で、オーガニックでないものは危険、ということではありません。オーガニックは、大まかにいえば、化学肥料と化学農薬を使用しないで栽培した農産物という意味です。化学肥料を使用していなくても、たい肥等の有機質肥料を過剰に使用すれば、植物体内の硝酸イオンが過剰になり、様々な悪影響がありますので注意が必要です。また、化学農薬を使用しなくても、病害虫によって損傷が起き、カビが発生する等、有害物質が産生された場合には必ずしもその農産物は安全とは言えません。適正に農薬を使用した野菜とオーガニックの野菜には一長一短がある、と考えるのがよいと考えます。</p>	52%
A2-9	<p>「食べてはいけない・・・」などといった書籍や週刊誌記事は消費者の不安を煽って売らんかな、という誤情報が多いので要注意です。農薬を適正に使用している場合には、作物に農薬が残留していたとしても人の健康への悪影響はないと言えるほどしか含まれていないことがわかっており、ご心配の必要はありません。それよりもむしろ、農薬の残留を心配して、野菜や果物を少量しか摂取しないことの方が健康に悪影響を及ぼします。安全に農薬を使用する仕組みを理解して、野菜や果物を積極的に摂取し、健康な食生活を送っていただきたいと思います。</p>	43%
A2-10	<p>上記1から9のうち、1項目も理解できるものがなかった。専門家の説明が理解できない。</p>	4%

Q3 専門家の説明文を読んだでの回答

A3-1	「農薬が残留した野菜や果物を毎日食べていると、将来何が起こるかわからない。」と考えていたが、専門家の説明を読んで、農薬を使用した野菜や果物も安心して食べられそうだ。	48%
A3-2	「農薬を使用した野菜と無農薬の野菜を比較すると、無農薬の方が安全」と考えていたが、専門家の説明を～（以下同上）安心して食べられそうだ。	41%
A3-3	「一部の農薬で発がんリスクがあるなら、残留農薬はゼロでない限り心配」と思っていたが、専門家の説明を～（以下同上）安心して食べられそうだ。	27%
A3-4	「農薬を使用した栽培は環境や持続可能性への影響が心配」と考えていたが 専門家の説明を～（以下同上）安心して食べられそうだ。	24%
A3-5	「農薬は、もし農家が多めに使用しても監視ができていのかどうか疑問」と考えていたが、専門家の説明を～（以下同上）安心して食べられそうだ。	24%
A3-6	「農家の方々が、自分たちが食べる野菜には農薬を使わないと聞いたことがあり心配」と考えていたが、専門家の説明を～（以下同上）安心して食べられそうだ。	25%
A3-7	「輸入した野菜や果物の残留農薬はすべてを検査しないなら安全とは限らない」と考えていたが、専門家の説明を～（以下同上）安心して食べられそうだ。	23%
A3-8	「野菜はオーガニックがよいと信頼できる人（家族・友人・知り合いなど）から教わっていた」が、専門家の説明を～（以下同上）安心して食べられそうだ。	27%
A3-9	「『食べてはいけない・・・』など食品の裏事情に関する書籍や記事（週刊誌・TV番組・ネット情報など）を読んで、農薬を使った野菜や果物は危険」と感じていたが、専門家の説明を～（以下同上）安心して食べられそうだ。	25%
A3-10	前問の専門家の説明を読んでも結局納得できないので、やはり農薬を使用した野菜や果物は、できるだけ食べたくない。	17%

小括

Q1 残留農薬を不安に思う要因

A1-2 無農薬が安全	64%
A1-1 将来想定外の毒性	59%

A1-9 食品裏事情記事	9%
A1-8 オーガニック志向	4%

項目による大きな偏りがある

Q2 説明文に対する理解・納得

A2-2 無農薬の危険性, カビ, 細菌	70%
A2-1 安全性評価試験, 無毒, 性量	62%

A2-9 発がん性試験	48%
A2-9 誤情報への警鐘	43%

説明文の理解率は比較的高い

Q3 選択の判断に対する肯定的な回答

A3-1 将来の想定外の毒性	48%
A3-2 無農薬の方が安全	41%
A3-3 発がんリスクを懸念	27%
A3-8 オーガニック志向	27%

との考え方を改めて
農薬使用野菜の容認に転じた

どれかの項目で肯定的回答をした回答者は83%

アンケートの集計と 対応項目での相関解析

集計結果

※説明文の理解群は農薬作物を受容する回答が多い。



相関解析を実施

- Q1 (不安) - Q2 (理解) } ・カイ二乗検定
- Q2 (理解) - Q3 (安心) } ・フィッシャー正確確率検定
- Q1 (不安) - Q3 (安心) } ・クラメール連関係数V



Q1-Q2間は全項目で相関なし
Q2-Q3間は全項目で相関あり
Q1-Q3間は4項目で相関あり

2. 農薬の発がん性への懸念
6. 農家自家用品の農薬不使用への誤解
8. オーガニック志向
9. 食品の裏情報に関する書籍、記事

1. 将来想定外の毒性が現れる不安

■ p<0.05
■ p<0.005

不安	人数	理解	人数	理解	人数	安心	人数	不安	人数	安心	人数	相関	χ ²	F	V
○	59	○	39	○	62	○	44	○	59	○	32	Q1 Q2			0.1014
		X	20			X	18			X	27	Q2 Q3			0.5872
X	41	○	23	X	38	○	4	X	41	○	16	Q1 Q3			0.1498
		X	18			X	34			X	25				

2. 無農薬が安全

不安	人数	理解	人数	理解	人数	安心	人数	不安	人数	安心	人数	相関	χ ²	F	V
○	64	○	43	○	70	○	36	○	64	○	31	Q1 Q2			-0.081
		X	21			X	34			X	33	Q2 Q3			0.3239
X	36	○	27	X	30	○	5	X	36	○	10	Q1 Q3			0.2016
		X	9			X	25			X	26				

3. 農薬の発がん性への懸念

不安	人数	理解	人数	理解	人数	安心	人数	不安	人数	安心	人数	相関	χ ²	F	V
○	32	○	15	○	48	○	22	○	32	○	7	Q1 Q2			-0.015
		X	17			X	28			X	25	Q2 Q3			0.4076
X	68	○	33	X	52	○	5	X	68	○	20	Q1 Q3			-0.079
		X	35			X	47			X	48				

4. 環境や持続可能性への影響

不安	人数	理解	人数	理解	人数	安心	人数	不安	人数	理解	人数	相関	χ^2	F	V
○	16	○	10	○	52	○	20	○	16	○	5	Q1 Q2			0.0917
		X	6			X	32			X	11	Q2 Q3			0.3524
X	84	○	42	X	48	○	4	X	84	○	19	Q1 Q3			0.0741
		X	42			X	44			X	65				

5. 農家に対する監視の不備

不安	人数	理解	人数	理解	人数	安心	人数	不安	人数	安心	人数	相関	χ^2	F	V
○	25	○	15	○	49	○	20	○	25	○	7	Q1 Q2			0.127
		X	10			X	29			X	18	Q2 Q3			0.386
X	75	○	34	X	51	○	4	X	75	○	17	Q1 Q3			0.0541
		X	41			X	47			X	48				

6. 農家自家用品の農薬不使用への誤解

不安	人数	理解	人数	理解	人数	安心	人数	不安	人数	安心	人数	相関	χ^2	F	V
○	18	○	11	○	53	○	19	○	18	○	9	Q1 Q2			0.0761
		X	7			X	34			X	9	Q2 Q3			0.2661
X	82	○	42	X	47	○	6	X	82	○	16	Q1 Q3			0.2705
		X	40			X	41			X	66				

7. 輸入品の全検査不徹底

不安	人数	理解	人数	理解	人数	安心	人数	不安	人数	安心	人数	相関	χ^2	F	V
○	23	○	13	○	52	○	19	○	23	○	7	Q1 Q2			0.0495
		X	10			X	33			X	16	Q2 Q3			0.3348
X	77	○	39	X	48	○	4	X	77	○	16	Q1 Q3			0.0966
		X	38			X	44			X	61				

8. オーガニック志向

不安	人数	理解	人数	理解	人数	安心	人数	不安	人数	安心	人数	相関	χ^2	F	V
○	4	○	3	○	52	○	23	○	4	○	3	Q1 Q2			0.094
		X	1			X	29			X	1	Q2 Q3			0.404
X	96	○	49	X	48	○	4	X	96	○	24	Q1 Q3			0.2207
		X	47			X	44			X	72				

9. 食品の裏情報に関する書籍、記事

不安	人数	理解	人数	理解	人数	安心	人数	不安	人数	安心	人数	相関	χ^2	F	V
○	9	○	5	○	43	○	20	○	9	○	6	Q1 Q2			0.0798
		X	4			X	23			X	3	Q2 Q3			0.4315
X	91	○	38	X	57	○	5	X	91	○	19	Q1 Q3			0.3026
		X	53			X	52			X	72				

Q2リスク理解度とQ3安心度の関連性分析

Q2専門家の説明への理解・納得 (A2-1~A2-10) vs. Q3 農薬使用作物への安心 (A3-1~A3-10)

		Q3 農薬使用作物への安心									
		A3-1	A3-2	A3-3	A3-4	A3-5	A3-6	A3-7	A3-8	A3-9	A-10
Q2 専 門 家 の 説 明 へ の 理 解 ・ 納 得	A2-1	0.000 0.000	0.000 0.000	0.000 0.000	0.014 0.016	0.003 0.003	0.096 0.152	0.067 0.088	0.048 0.064	0.032 0.035	0.000 0.001
	A2-2	0.055 0.080	0.001 0.002	0.003 0.003	0.002 0.001	0.002 0.001	0.450 0.615	0.011 0.010	0.128 0.148	0.023 0.025	0.004 0.008
	A2-3	0.000 0.000	0.003 0.004	0.000 0.000	0.000 0.001	0.000 0.000	0.001 0.002	0.018 0.031	0.023 0.026	0.021 0.036	0.027 0.034
	A2-4	0.043 0.048	0.057 0.069	0.007 0.012	0.000 0.000	0.000 0.000	0.006 0.006	0.017 0.019	0.007 0.012	0.064 0.070	0.130 0.183
	A2-5	0.009 0.016	0.005 0.008	0.000 0.001	0.001 0.001	0.000 0.000	0.002 0.002	0.001 0.002	0.002 0.003	0.002 0.002	0.076 0.110
	A2-6	0.153 0.167	0.082 0.104	0.034 0.043	0.013 0.018	0.013 0.018	0.008 0.011	0.070 0.096	0.001 0.001	0.002 0.002	0.590 0.606
	A2-7	0.016 0.018	0.021 0.026	0.002 0.003	0.002 0.002	0.000 0.000	0.001 0.001	0.001 0.001	0.002 0.003	0.006 0.006	0.327 0.426
	A2-8	0.043 0.048	0.002 0.002	0.007 0.012	0.010 0.011	0.002 0.002	0.001 0.001	0.017 0.019	0.000 0.000	0.001 0.001	0.130 0.183
	A2-9	0.030 0.043	0.001 0.001	0.000 0.000	0.000 0.000	0.000 0.000	0.014 0.020	0.003 0.004	0.001 0.001	0.000 0.000	0.214 0.285
	A2-10	0.347 0.619	0.089 0.142	0.214 0.572	0.251 0.570	0.251 0.570	0.239 0.569	0.265 0.571	0.214 0.572	0.239 0.569	0.002 0.015

リスク理解度と安心度に有意差が認められる項目は非常に多い。すべての項目で、対応するリスク理解度と安心度に関連性があることが有意で示されたが、対応しない項目間でも多くの項目で関連性が認められた。

詳細な項目の理解を得て安心という情報処理のプロセスで農薬の安心を得るといよりはむしろ、全体的な情報を理解して安心を得た人と、提供された情報が全体的に理解できず安心が得られなかった人に区別されるという結果となった。

上段 : x2 の p 値、下段 : Fisherの正確確率での p 値

相関性あり p<0.05 p<0.005 説明と安心が対応する箇所

Q1不安因子の主成分分析 と Q2-3との関連性分析

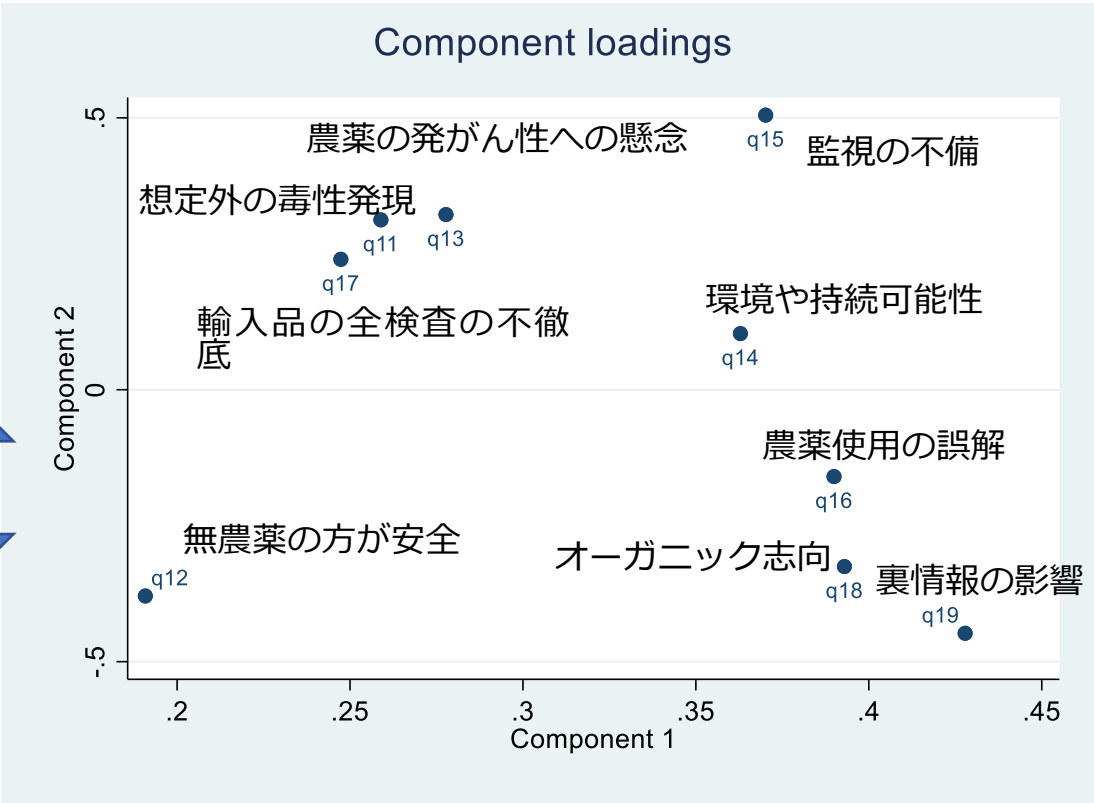
第1主成分による被験者分類とQ2-3のクロス集計

PV1	Q2-3		Total
	0	1	
0	38 32.8 60.32	25 30.2 39.68	63 63.0 100.00
1	14 19.2 37.84	23 17.8 62.16	37 37.0 100.00
Total	52 52.0 52.00	48 48.0 48.00	100 100.0 100.00

Pearson chi2(1) = 4.7193 Pr = 0.030
 Cramér's V = 0.2172
 gamma = 0.4281 ASE = 0.174
 Fisher's exact = 0.039
 1-sided Fisher's exact = 0.024

pv1=0 : 第1主成分(負) (自身による農薬の安全性評価)
 Pv1=1 : 第1主成分(正) (信頼による農薬の安全性評価)
 Q2-3=0 : Q2-3の専門家の説明を理解できない,
 Q2-3=1 : Q2-3の専門家の説明を理解できた
 Pearson chi2 (1) : 自由度1のカイ2乗値, Pr : p値.

安全管理に対する不信
 ↑
 農薬に対する表象
 ↓
 無農薬志向



自身での安全性評価 ↔ 信頼による安全性評価

農薬に対する安全性、安心に対する情報処理手法

第一主成分のスコアが低い集団（自身により農薬の安全性を評価している集団）の方が、Q2-3「農薬の発がん性への懸念」という学術的説明に対して理解が得にくく、スコアが高い集団（他者からの信頼により農薬の安全性を評価している集団）の方がQ2-3「農薬の発がん性への懸念」の説明に対して理解を得やすいことを意味した（ $p=0.030 < 0.05$ ）

考察

- 本調査により、「農薬を使用した食品は食べたくない」と回答した100人のうち、専門家の説明を読んだ後、「安心して食べられそうだ」と回答したのは83人であった。
- 全体として理解が進むほど安心（信頼）につながった傾向が見られた。
- 理解度と安心度に対して、対応する項目だけでなく対応しない項目にも関連性が示されたことから、農薬に対する不安に対応する情報だけでなく、それ以外の情報を統合的に判断して安心を得ていることが示唆された。

考察

- 自分自身で情報を判断して農薬の安全性評価を行う消費者

科学的安全性評価の学術的説明（発がん性への懸念払しょく）に対する理解が得にくい。 ⇔

信頼によって農薬の安全性評価を行っている消費者

科学的安全性評価の学術的説明（発がん性への懸念払しょく）に対して理解を示した。

科学的安全性評価の結果は一般市民にはその詳細を理解しづらい内容である。

科学的に示された安全性評価の情報提供が、

「なんとなく安全」という理解につながり、

安全性確保に対する消費者理解につながると考えられる。

アンケート結果から見えてきた問題点

- 選定した不安因子が、Q1-1、Q1-2、Q1-3までは消費者の不安因子に合致していたものと思うが、4番目以降が合致せず、不明瞭になったのではないか？
- 専門家の説明文が長すぎて、一般の消費者が読んで理解しようとする程度を越えていたのではないか？
- 一般消費者が抱く農薬に関しての不安は、かなり漠然としたものなのではないか？
- 農薬は、リスクの範囲が、①環境、生物 ②農業者③消費者と多岐にわたる。対象が異なる様々な設問が混在することで、焦点が定まりにくいのではないか？

結論

- 詳細な項目の理解ではなく
「全体的な情報を理解することにより、安心を得た人」と
「提供された情報が全体的に理解できず安心が得られなかった人」に
区別されるという結果となった。
- 本研究から、残留農薬のリスクに関しても、科学的知見の理解により、消費者に安心感が見られること、消費者の不安因子に寄り添ったピンポイントの学術的説明がリスク認知バイアスの補正に役立つことが示唆された。今回の結果を活かし、残留農薬について、スマートリスクコミュニケーション手法をさらにバージョンアップしていくことを考えたい。

謝辞

- 共同研究でご支援いただいた東京大学大学院農学生命科学研究科教授桑原正貴先生に厚く感謝申し上げます。

ご清聴ありがとうございました